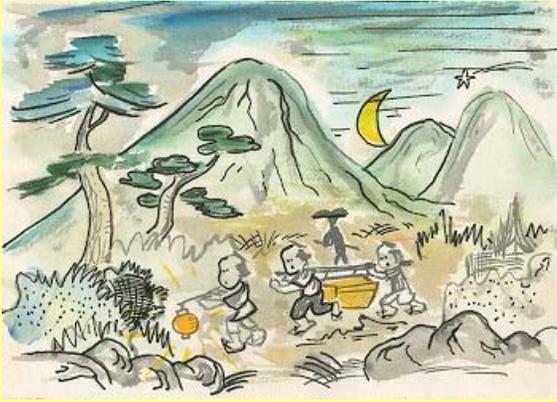




東浦の横浜という村の話じゃ。この村では正月になると牛おにがあばれるので 村一番の美しい娘をさし出すのがならわしやったそうな。

ある正月のそれは美しいよさりじゃった。山道を一人のサムライが道でも迷ったかとぼとぼと歩いていると オイオイ泣きながらヒツギをかついだ村人が通りかかった。ちょうど道を聞こうと思っていた矢先じゃから声をかけたんじゃな。



「これこれ 正月から仏とは病でもあったか」

「ヘイ お武家様。これこれしかじか・・・娘を人身御供(ひとみごくう)に海辺のほこらに供えに行くところですだ」

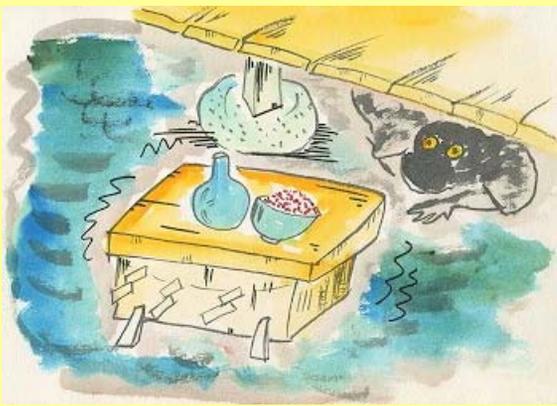
「何 それはかわいそうに。よし 一つ助けてやろう」



「牛おにの目ぐすり」

横浜の民話

1/4



娘をかえすと サムライはお宮さんまで  
行き えんの下に身をかきし 今やおそしと  
牛おにの現われるのを待ったんじゃ。

ザアーと 波を切る音がして 海の中から  
牛おにが顔を出し

「ウヒヒー 今年の娘は美しいかのー」  
すごい顔をして 供え物のドブクを飲み  
コワメシを食い 腹いっぱいになったところ  
でヒツギをあけたんじゃ。ヒツギの中はカラ  
ツポだったので

「おのれ よくもだましたな」



その時とばかり サムライは刀を振りか  
ざし切り込んだ。たたかううちに牛おにの  
半分にもたらんサムライは 体一ぱいに傷  
をおい 今はこれまでとばかり力をふりし  
ぼり 切りあげたんじゃ。ポンコロツと牛お  
にの首が落ち サムライもまた最後の力を  
ふりしぼって牛おにのキモをギュウとにぎ  
り取ると そのまま息がたえたのじゃ。



「牛おにの目ぐすり」

横浜の民話



村人がおそろおそろ来てみると 板に牛おにの首がたれさがってあってな

「ギャー おそろしや」

「あのサムライがこの村をすくったんだから せめて刀をお宮にまつろうか」

「うん それがええ それがええ」

それからどれほどしたことか この村のばあさんが目を悪くして寝ていたんじゃ。



山寺の鐘がゴーン ゴーン ゴーン。スーと生ぐさい風が鼻をつくので ハッと目をさますと まくらもとに フアーとサムライの亡霊(ぼうれい)が立っていてな 赤い玉をさし出し

「これー ばあーさん。これを水にとかして目を洗うがよい」

スーと消えたんじゃ。ばあさんは夢かと思いい ホベタをつねってみたら やっぱり痛い。ついでにシリもつねってみたら 黄色いけむりが出たそう。な。きっと元せんがゆるんでいたんじゃな。さっそく目を洗ったら ケロリと直って

「ああ ありがたや」



「牛おにの目ぐすり」

横浜の民話

3/4



きっと その薬は牛おにのキモじゃろうと  
村人はびっくりこいたんじゃ。

それから横浜には なげーこと目を悪くす  
るものはおらんようになったということだ。  
めでたし めでたし。

「牛おにの目ぐすり」  
横浜の民話

4/4